

# ラグビーにおけるタックルの成功率と勝率の関係性 Relation between Success Rate of Tackle and Game Performance in Rugby

1K09A236 山本 萌衣  
指導教員 広瀬 統一先生 副査 山本 巧先生

## 【緒言】

ラグビーフットボールはポジションごとに体格やプレーにおける役割が異なるものの、概してスピードやパワーのみならず高い有酸素能力も求められる。また、1995年の第3回ラグビーワールドカップ終了後、キックを多用するキッキングラグビーから、パスとランニングを多用しコンタクト回数の多くなる継続ラグビーへ変化した。継続ラグビーでは、いかにボールを維持し連続攻撃を仕掛けるかが重要になるため、守備側の観点から考えるとタックルの成否が勝敗に強く影響することが推察される。そこで本研究ではタックルに焦点を当て、タックルの成功率、タックルの地域、時間帯などを数値化し、タックルの成功率および時間帯、地域とチームの勝率との関係を明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

対象は2009-2010シーズン、2010-2011シーズン、2011-2012シーズンの3シーズンの、関東大学対抗戦Aリーグに所属した上位5チームの中の2チームを中心とした計21試合を家庭用ビデオカメラで撮影したもの、又は公共放映映像を対称に分析した。

上記21試合のうち、引き分けの1試合を除いた20試合のタックル数、タックル成功数、失敗数を記録した。タックルの成功、失敗の定義は、ラグビーの競技特性を考慮し、タックル後に自分たちのプレーでターンオーバー出来たものや相手のペナルティによりターンオーバーしたものを成功、ターンオーバー出来なかったものを失敗とした。また、ブレイクダウンやラック、モールなどサポートプレーヤーがただ身体をぶつけたものはタックルとみなさなかった。タックル成功率は1試合でのタックル成功数をタックルの起こった総数で除して算出した。さらに、タックルが起こった時間帯、地域を記録した。時間区分は、20分毎の、1試合を大きく4つの時間帯に大別した。地域は、自陣/敵陣に大別し、更に両者を2つずつの4地域に区分した。全測定・評価項目を勝利群と敗北群で比較し、2群間における対応のないt-test検定を用いて統計学的有意性を検討した。統計学的有意水準は危険率5%未満とした。

## 【結果】

20試合(3シーズン)の結果を勝利群と敗北群で比較したところ、勝利群のタックル成功率は敗北群よりも有意に高かった(勝利群:16.7±7.2、敗北群:

11.1±5.0)( $P<0.01$ )(図1)。また、タックルが成功した時間帯では両群間に有意差が見られなかったものの、試合の最後の20分間(61~80分)でのタックル成功率の差がシーズンを重ねるごとに高くなっていった。2009-2010シーズンでは2.1±3.4%、2010-2011シーズンでは5.4±1.9%、2011-2012シーズンでは8.0±4.9%の差があった。タックル成功地域に関しては、敵陣に比べ自陣での成功率が高く、また直接トライに結びつく可能性の高い自陣22mラインからゴールラインの地域でのタックル成功率は勝利群と敗北群の間で年々大きくなる傾向が示された。

## 【考察】

ラグビーの試合において、タックルの成功率は勝敗にある程度影響していると考えられるが、シーズン別に検討するとそれぞれのシーズンに差があり、年々勝利群と敗北群のタックル成功率の差が縮まっていた。このことは現在のラグビーはタックルを含めたディフェンス網が発達してきており、よりトライを取ることが難しくなっていると言える。その中で今後「継続ラグビー」をして勝率を高めるためには、試合の最後まで質の良い、精度の高いタックルをし続け、自陣22mラインからゴールラインの地域においていかにタックル成功率を高く維持するか、ということに加え、トライを取るまでにいかに何度も連続攻撃を仕掛け、防御ラインをいかに戦術的にまた組織的に崩しアタックするか、ということが重要であると考えられる。

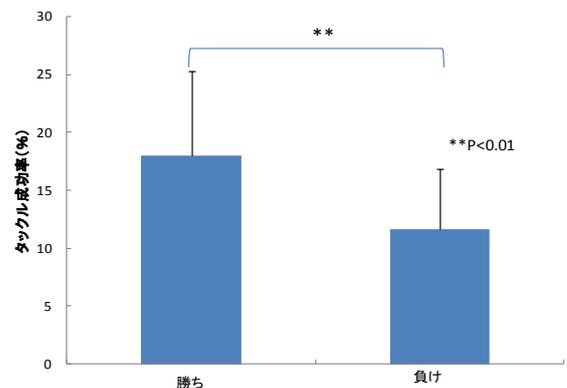


図1. 20試合(3シーズン)の勝利群と敗北群のタックル成功率の関係